

接続助詞「から」と「ので」に関する一考察 —前件のモダリティとの共起を手掛かりにして—

李 惠正 (東北大学大学院文学研究科)[†]

A Corpus-based Study on *KARA/NODE*: Focusing on Their Co-occurrence with Modality Expressions

Hyejeong Lee (Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University)

1. はじめに

「から」と「ので」は前件と後件の因果関係を表す接続助詞であり、両者の相違点に関しては様々な観点から研究がなされている。中でも「から」と「ので」の使用と「主観/客観」との関係については、永野(1952)による指摘以来多くの研究が行われてきたが、未だ明確な結論には至っていないのが実状である。

本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJと呼ぶ)を調査データとして、表現者の心的態度を表すモダリティ表現と「から」「ので」の共起様相から両者の「主観/客観」という観点を再考する。

2. 「から」「ので」と「主観/客観」

2. 1 先行研究

「から」「ので」の主観性の議論の始発点となった永野(1952)は以下のように述べている。

「から」で結びつけられる前件・後件は元来二つのものであって、それが話し手の主観によって原因結果・理由帰結の関係で結び付けられる。これに対して「ので」は事がらのうちにすでに因果関係にたつ前件・後件が含まれていて、ありのままに客観的に描写する場合に使われる。つまり、「から」は話し手の主観が充分の責任を持つという意味の一方で、「ので」は主観の責任がないということになる。

(永野 1952 pp.37-38)

- (1) a. 山に近いので昼間はひどく暑いが、 (永野 1952 p.36)
b. ?山に近いから昼間はひどく暑いが、 (筆者による改変)

永野(1952)は、(1a)のような例をあげて、「ので」を「から」に置き換えると不自然な言い方になるか、「ので」よりもしっくりしない感じのものになると説明している。

この永野説による「から」「ので」と「主観/客観」との対応関係は、その根拠の妥当性について山田(1984)、趙(1988)による疑問が呈されたのをはじめ、主張において付け加えはあ

[†] danahan.j@gmail.com

るものの概ね永野に同意する立場である森田(1989)や、「から」は中立的で「ので」は客観的であるとする今尾(1991)、尾方(1993)などによって活発に議論されてきた。

これらに対して国広(1992)は永野説とは逆の考え方を示している。すなわち、「のだ」の意義素と語のスコープという概念を用いて、「ので」は命題を主観的に、「から」は客観的にとらえるものとしている。

- (2) a. 当地は海岸に近いので健康によい。
b. 当地は海岸に近いから健康によい。 (国広 1992 p.32)

国広は(2)の例文について、(2a)は前件の内容を主観的に判断して、私は後件のように思うということを表しているのに対し、(2b)は後件が前件の帰結として生じることを客観的事実として提出し、そのことについてまったく疑いを抱いていないという含みを感じられると述べている。

このように未だに議論されている「から」「ので」の「主観/客観」の対応関係について岩崎(1995)は、両者の結びつきが主観的/客観的というのがどのようなことを意味するのかがはっきりしていないため、多くの研究で「から」「ので」の問題が「主観/客観」の特徴づけや区別問題に還元されてしまうことがあると指摘している。

2. 2 研究目的

本稿では大規模日本語コーパスを用いる実証的な方法で「から」「ので」の使用様相を観察し、「から」「ので」の「主観/客観」の対応に関して再考する。具体的には、BCCWJ の出版サブコーパス「書籍」を対象にモダリティ表現と「から」「ので」の共起関係から考察を行う。

日本語文法におけるモダリティ表現とは、文の構造の1つの側面であり、客観的な事柄についての話し手(言語主体)の表現時の態度の概念であると広く同意されている(ナロック 2009 p.35)。さらに、伊藤(2005 p.13)はその話し手の態度を「陳述的側面」と言い、複文の前件¹にも適用されるとしている。

上記のことから、「から」「ので」を含む複文において前件に現れるモダリティ表現は、後件に結果を導く場合に話し手の態度を表す文の述べ方であり、文全体にも影響力があると考えられる。したがって、「から」「ので」が持つ「主観」「客観」に関する性質に応じて、前件に主に用いられるモダリティ表現形式²との共起関係において相違点が存在すると考えられる。共起頻度が高いモダリティ形式から「から」「ので」の「主観/客観」という性質について調査することで従来とは異なる観点から考察が可能になることを期待する。

¹ 一般的に複文の従属節、従属句と呼ぶ。

² 本稿におけるモダリティ表現については、モダリティ表現そのものの機能の相違や客観化を許すものとの区別を図るわけではない。各モダリティ表現の詳細な機能は益岡(1991)、森山・安達(1996)、益岡・田窪(1992)に委ねる。

3. データの収集と分類

3. 1 調査対象

本研究では、「から」「ので」とモダリティ表現との共起関係について、国立国語研究所が開発した BCCWJ の出版サブコーパスの「書籍」を検索ツール「中納言」を用いて調査した。

出版サブコーパスの「書籍」³は 2001 年から 2005 年の間に国内で発行されたものが対象であり、書き言葉が生み出される出版の実態に着目したものである。また、文字言語ではあるが、地の文と会話文が混ざっており、広範囲で多様な使用場面が存在していることが利点である。

この出版サブコーパスの「書籍」に対し、「から」と「ので」をキーワードとして長単位検索で全数調査を行った。検索条件の詳細は以下のとおりである。

「から」は、語彙素が“から”、品詞が“接続助詞”、「ので」は、語彙素が“のだ”、活用形が“連用形一般”で検索キーワードを指定して検索を行った。

「中納言」は必要な資料のみを効率よく取り出せるようにキーワードの前・後の条件を指定することが可能なツールである。この「中納言」の機能を使い、前方共起を丁寧体と普通体の二つに分けた。丁寧体とは、「です」「でした」「でしょう」「ます」「ました」「ません」の活用形を、普通体とは「コピュラ(だ/な)」「動詞終止形」「形容詞終止形(〜い)」「形容動詞(だ/な)」「助動詞」を指す。これらをそれぞれの前方共起の条件と指定し、検索を行った。中納言を用いた接続助詞としての「から」「ので」のより詳細な抽出方法については李(2013)を参照されたい。

本調査では、出版サブコーパスの「書籍」のコア、非コアデータのすべてを対象として、KWIC データを収集し、目視による確認作業を行い、接続助詞として使われた「から」「ので」がモダリティ表現と共起されている例のみを分析対象とした。「からといって」「からって」などの複合辞、「〜は、〜からだ。」のような終助詞的な形式、後件が現れてないもしくは、後件に述語がなくて後件の意味判定が曖昧な文は対象外とした。

3. 2 調査結果

本調査は共起数が多いモダリティ表現の相違から「から」「ので」の「主観/客観」について考察を行うことが目的であるため、出版サブコーパスの「書籍」の全データに対して実数調査を行った。そのためモダリティ表現においても実際に現れた形式とその数をカウントしている。しかし、本稿では紙幅の制約で出現数をもっとも多い表現形式順から表示することとし、出現数 15 件未満の形式は表からは省略した。

次の表 1 と 2 に、BCCWJ の出版サブコーパス「書籍」から接続助詞として使われた「から」「ので」複文の総件数と、そこから「から」「ので」とモダリティ表現との共起出現数が多い順をまとめて表示した。また、両者の複文の総出現数が異なるため、両者の複文の総出現数に対する各モダリティ形式の 100 件あたりの調整頻度⁴も合わせて示した。

調査の結果、「から」複文の総出現数は 14,307 件、「ので」複文は 21,415 件であった。その中で前件の末にモダリティ表現が用いられた「から」の文は 1,219 件で、「から」複文全体の 8.52% を占めている。「ので」の文においては 914 件検索され、「ので」複文全体の 4.26% を占める結果であった。

³ 山崎他(2011)に詳しい。

⁴ 石川他(2010)『言語研究のための統計入門』の付属 CD-ROM を用いて分析した。

表1. 「書籍」におけるモダリティ表現と「から」

出版サブコーパス 「書籍」	から複文 (総 14,307 件)	
	出現数(件)	100 件あたり 調整頻度(回)
わけだ	366	2.56
だという	147	1.03
わけではない	59	0.41
たい	58	0.41
はずだ	56	0.39
ようだ	47	0.33
と思っている	39	0.27
そうだ(伝聞)	36	0.25
と思う	35	0.24
しそうだ	34	0.24
しようとする	32	0.22
ということだ	31	0.22
することだ	29	0.20
してもいい	28	0.20
かもしれない	27	0.19
たくない	26	0.18
らしい	18	0.13
しなくてもいい	15	0.10
しなければならない	15	0.10
べきだ	1	0.01
モダリティ総出現数	1219	8.52
全体割合	8.52%	

表2. 「書籍」におけるモダリティ表現と「ので」

出版サブコーパス 「書籍」	ので複文 (総 21,415 件)	
	出現数(件)	100 件あたり 調整頻度(回)
たい	94	0.44
と思う	87	0.41
わけではない	83	0.39
しなければならない	82	0.38
しそうだ	57	0.27
だという	54	0.25
ようだ	44	0.21
と思っている	36	0.17
しようとする	35	0.16
たくない	30	0.14
と思われる	29	0.14
わけにはいかない	29	0.14
ということだ	29	0.14
すればいい	23	0.11
かもしれない	23	0.11
はずだ	18	0.08
することだ	15	0.07
べきだ	1	0.00
モダリティ出現数	913	4.26
全体割合	4.26%	

次節では、その使用背景と「から」「ので」の「主観/客観」の性質を関連付けて考察する。

4. 分析

表1と2からモダリティ表現形式の詳細を比較すると、両者には次のような相違点が見られた。

第一に、「から」と最も共起頻度が高いモダリティ表現は「-わけだ」、「-だという」のように一般的に受け入れられている事柄や社会的通念を言う時に用いられる表現が多かったのに対し、「ので」は「-たい」、「-と思う」のように述べる事柄に対して話し手の個人的な考えや不確かなことを表す際に用いられる表現が多かった。

第二に、「から」の複文では上位の3つのモダリティ表現形式が全体の半数を占めており、使用されるモダリティ表現に偏りがあることが分かる。それに対して、「ので」は「から」に比べて上位の表現形式に偏重される傾向は見られない。

以上の結果から両者のモダリティ表現との共起には異なる様相があることが明らかになった。

益岡(1991)ではモダリティ表現を類型化してそれぞれの特徴と役割によって9つに分類し、「モダリティのカテゴリー」と呼んでいる。中でも「真偽判断」、「価値判断」、「説明」、「みとめ方」の4つのモダリティ類型⁵が本稿と関連されると考えられる。そこで、益岡(1991)の「モダリティのカテゴリー」の分類とそれぞれの機能を参照し、全体の使用傾向を観察したあと、両者と共起頻度が高いモダリティ表現形式を考察することにする。

表3. 「から」「ので」と共起するモダリティ表現の分類

区分	機能	分類	検索表現	「から」複文 (14,307 件)	「ので」複文 (21,415 件)
第1類	動きに対する評価 (価値判断)	必要	しなければならない しないといけない せねばならない しなくちゃいけない しなくちゃいけない しなくてはならない	43 (3.53%)	109 (11.94%)
		許可	してもいい すればいい しなくてもいい しない方がいい 方がいい	51 (4.18%)	43 (4.71%)
		義務	すべきだ することだ するべきではない せざるをえない するほかない	33 (2.71%)	23 (2.52%)
		禁止 望ましくない	わけにはいかない してはいけない してはならない するといけない しちゃいけない	27 (2.21%)	42 (4.60%)
第2類	出来事の確からしさを述べる (真偽判断)	不確かなこと	かもしれない しかなえない と思われる	114 (9.35%)	190 (20.81%)
		状況からの判断	はずだ しそうだ しそうではない	164 (13.45%)	143 (15.66%)
		伝え聞き 確実、確からしき (説明)	わけだ だという とのことだ わけである っていう ってことだ わけではない ということだ そうだ(伝聞) のである	655 (53.69%)	191 (20.92%)
第3類	疑問・確認	尋ねる・疑う	だろう?、のか、もんか、じゃないか、でしょう?		
		確認・同意の求め	終助詞、ね、よね、じゃないか、でしょうなど		
第4類	意志・勧め	話し手の意志的な動作	しようとする つもりはない したつもりだ(主語の考え、思い込み)	45 (3.69%)	43 (4.71%)
		話し手の希望、希求	たい たくない	84 (6.89%)	124 (13.58%)
第5類	依頼・命令	話し手が聞き手の行動を要求	てほしい てほしくない	3 (0.25)	5 (0.55)
総出現数(件)				1,219	913
100件当りの調整頻度(回)				(8.52)	(4.26)
「から」複文の全体に対する割合				8.52%	4.26%

⁵ 言及した4つの他に「態度伝達」、「ていねいさ」、「表現類型」、「テンス」、「取り立て」のモダリティがある。

⁶ 第3類に属するものと第2類の「-のである」は、複文の前件には接続され難いため、本調査では対象外とした。

4. 1 「から」「ので」とモダリティ表現の使用傾向

まず最初に、「から」「ので」がどのような機能を持つモダリティ表現と共起し易いかという全体的な傾向を観察するために、本調査で検索されたモダリティ表現形式を森山・安達(1996)の分類⁷に沿って出現数を整理する。

表3では、各モダリティ表現を機能によってグループ分けし、同じグループに属する表現の出現件数をまとめて表示した。また、出現件数の下の括弧の中には「から」「ので」のそれぞれの総出現件数である1,219件と913件において各グループが占める割合を表示した。さらに、3.2節の表1と2に省略したモダリティ形式を検索表現のところに全て示した。

「から」は「ので」に比べて前件にモダリティ表現を用いる頻度は高いが、使用する表現形式に偏りが見られる。「ので」よりも「から」との共起頻度が高いモダリティ表現形式は動きに対する評価を表す機能を持つ「義務」のモダリティ表現(第1類)と出来事の確からしさを述べる「伝え聞き」を表す表現形式(第2類)である。特に、「伝え聞き」を表す「わけだ」、「という」、「そうだ」などの表現は、モダリティ表現と共起している「から」全体の半数を占める53.7%の割合で用いられている。これは「わけだから」、「というから」、「そうだから」のように、前件の事柄、もしくは命題が、ある確かな情報源から得られたものであることを説明する場合に「わけだ」、「という」、「そうだ」などのモダリティ表現で限定した後、その事柄について話し手の主観を交えずに後件の帰結に連結する際には「ので」より「から」が選好されることを示している。

また、益岡(1991)で言う「価値判断モダリティ」に属する「義務」(第1類)の表現では、「ので」の共起頻度と僅差であるが、「から」のほうが選好されている。「義務」に関するモダリティ表現は、論理的にもしくは一般的に許容される範囲の中で望ましいことや必要だと認められることへの許可と義務の意を表しており、それに対する後件には前件から考えて当然な帰結や必要性を表す事柄がつながる。そのような際に「ので」より「から」が選好されていることから、「から」は前件と後件との妥当性をより強調する役割をすると考えられる。

一方で、「ので」は特定のモダリティ表現に偏らず、多様な表現と共起している。これは「から」より「ので」のほうが多様な場面と話し方に包括的に対応できる機能を持っているためと考えられる。また、「ので」は第2類の不確かなことを表すモダリティ表現との共起が多い。これらのモダリティ表現は益岡(1991)の「真偽判断モダリティ」に属するものであり、中でも確信を持って言い切れない場合に何らかの形式を用いて断定を保留する表現である(益岡 1991 p.110)。ある事柄に対して断定を保留する場合、その判断は話し手自身の責任である必要がある。さらに、話し手の判断は何らかの理由で確定的な言い方を避けていることになる。このように話し手の不確かなことに関する判断を「かも知れない」、「はずだ」、「みたいだ」などの共起形式を用いて表しており、その前件の不確かな事柄に対して話し手自身が主観的にとらえるのが「ので」の機能であると言える。さらに、「ので」は「意志」と「希求」の場合(共に第4類)と「依頼」の場合(第5類)にも「から」よりも選好される傾向が見られる。

以上のように、「から」は特定のモダリティ表現との共起が多く現れ、これは「から」が事柄をそのまま伝える場合に主に使用され、その根拠となる事柄に対してより妥当性を強調する機能を持つためであると考えられる。その反面、「ので」は多様なモダリティ表現と幅

⁷ 森山・安達(1996)では「-たい」「-たくない」について言及はなかったが、加藤(2006)では希求を表すモダリティ助動詞として分類してあるため筆者の判断により第4類に含めた。

広く共起しており、話し手自身の直感的な判断による感覚で前件と後件を接続する機能を持つと言える。

4. 2 モダリティ表現と「から」

「から」と共起数が多い上位のモダリティ表現の中で注目する点は「わけだ」というモダリティ表現の使用である。「わけだから」の形式は調査した表現の中でもっとも多い 366 件 (100 件当り 2.56 回)使用された。

益岡(1991 p.145)によると「わけだ」は、説明モダリティの範疇に属するもので、その文に対する帰結を得るためにはその命題が話し手と聞き手が共有する一般的な知識によるものでなければならない。言い換えると、「わけだ」が使用されるためには、話し手のみが知っている知識に根拠するのではなく双方が承知している事柄である必要があるということになる。そのようなモダリティ表現と共起する「から」は一般的な事柄を事実として受けて後件の結果のほうに当然な成り行きで導く役割を持つ。つまり、話し手と聞き手の相互が承知している前件の事柄を「わけだ」というモダリティ表現を使用することでより客観化し、「から」と共起させることで確信を持って説得的に提示している。

- (3) a. 次に、効果的な接待の仕方を考えること。接待は相手に喜んでもらうためにするわけだから、相手の好みに合わせる必要がある。たとえばお酒の飲めないお客をバーで高いお金を使って接待しても、喜ばれるどころか、嫌な思いをさせるだけになる。 (PB13_00699)
- b. 接待は相手に喜んでもらうためにするから、相手の好みに合わせる必要がある。 (筆者による改変)

「相手の好みに合わせる必要がある」という後件の理由を述べる場合において「接待は相手に喜んでもらうためにするわけだから」という答えと「接待は相手に喜んでもらうためにするから」のという判断の答えにおいて、モダリティ表現を使わない(3b)のほうが「接待というのは相手に喜んでもらうために当然すべきである」というような強い口調に感じられる。このように、「わけだ」というモダリティ表現を用いて一般化させた前件を受ける際には「ので」より「から」を主に用いる。「から」は前件に対する後件の事柄の妥当性を高める役割をする。

次に、共起頻度が二番目に高いのは「-という」の形式である。ある情報が自分の考えではなく、第三者から得た情報である場合、自分の考えを加えずにそのまま伝える際に用いるモダリティ形式である。

- (4) a. その討論会では近畿代表に選ばれ、東京まで行ったというから、半端じゃない。 (PB32_00231)
- b. 川釣り専門で、年に何回か休みをとっては、世界中の川を釣り歩いていたというから優雅なもんだ。 (PB29_00723)

(4)の例は前件で述べる外からの情報をそのまま受け入れて後件で述べる判断の根拠とする例である。「という」のモダリティ表現を用いて前件の事柄を一般化し、「から」で接続

することで前件の事柄から考えると一般的にそう思われるという意を後件が表している。しかし、(4)の例における「というから」を「というので」に置き換えると、前件が提示する根拠を受けた後件の当然性が、「から」の場合に比べて落ちることになり、話し手のみの感覚を表す感じになる。

以上、「から」と共起するモダリティ表現の中で使用頻度が最も高い「わけだ」、「という」の二つの形式を考察した。両形式は前件で提示したことから後件の事柄が必然的に導かれることを納得する意を表し、「ので」より「から」が選好して用いられる。この際、「から」は前件の根拠をより客観化する役割を持ち、後件で述べる事柄が一般的な当然性を持つようにする。本研究の調査から得られた結果は、従来の研究における「から」は主観的に前件と後件を結びつけるという主張とは異なる結果であると言える。

4. 3 モダリティ表現と「ので」

「ので」ともっとも共起数が多いモダリティ表現は「-たい」、「-と思う」、「-わけではない」である。

まず、「たい」は希求を表すモダリティ表現として分類され、話し手の行動や状態について希望を表すものである。森田(1980)によると、「たい」を用いて第三者の希望を表すためには「彼は水が飲みたいのだ/飲みたがっている」のような言い方をしなければならない。したがって、「たい」というモダリティ表現は話し手自身の希望を表しており、正に主観的な表現であると言える。

- (5) a. まさに「子は親の鏡」。私は子どもの笑顔を見たいので、部屋のあちこちに鏡をつるして、そこに自分の顔がうつる度に笑顔を作るように努力をしています。
いつも笑顔で子育てをしたいと思います。 (PB13_00234)
- b. 私は子どもの笑顔を見たいから、部屋のあちこちに鏡をつるして、そこに自分の顔がうつる度に笑顔を作るように努力をしています。
(筆者による改変)

(5a)の「私は子どもの笑顔を見たい」という前件はモダリティ表現「たい」を用いて話し手の本人にのみ当てはまる事柄として提示されており、「どうして部屋のあちこちに鏡をつるすか」という後件の理由として前件のように考えるのも話し手のみの主観的な感覚である。一方で、(5b)のように「見たいから」に置き換えると同じく「たい」というモダリティ表現を用いているが、「子どもの笑顔を見るために部屋のあちこちに鏡をつるすという行為は一般的に皆が行っていること」という異なる感じになる。言い換えると、(5b)ではそうすることは当然という前件の事柄に対する判断を一般化してしまうのである。つまり、(5a)のように前件の事柄を「ので」を用いて主観的に接続する一方で、(5b)のように「から」を用いると客観的な命題として捉えられるのである。

次に、「-と思う」はその場の証拠や状況からの事柄に対してそれが個人的な考えで確実だとは言いつけない場合に使われる。直前に述べた物事を自然に知覚・認識し、判断内容を直感的に下して自分の意見として示す、または自分の感覚や感情を示してその気持ちを自然に感じる場合に用いるモダリティ表現である。

- (6) a. … 高回転域になった時に回転が重くなるっていう結果が出たんだよ。みんなも興味があると思うので、もう少し詳しく話をすると、七千五百回転を過ぎたあたりで重くなる。 (PB4n_00003)
- b. みんなも興味があると思うから、もう少し詳しく話をすると、七千五百回転を過ぎたあたりで重くなる。 (筆者による改変)

(6a)の前件も(5)と同様に解釈することが可能であると考えられる。「みんなも興味があると思う」というのは話し手自身の考えであり、あくまでも自身の感覚として主観的に捉えている。(6b)のように前件と後件を「から」を用いて接続すると、「みんなが興味を持つのは当然のことである」という言い方にとらえられる。

以上のようなモダリティ表現の機能から分かるように主観的であるというのは、第三者もしくは聞き手を想定に入れないで表現をすること、またはある命題についてそれに関する情報が話し手のみのものであることであると言える。話し手が述べる事柄が一般的に同意されていることではない場合や、ある情報が予め聞き手と共有されていない場合は主観的な事柄になり、「ので」が選好される。その一方で、一般的に容認されているか、その情報が聞き手も承知しているのであればそれは客観的な事柄であり、「から」が選好されると言える。

5. まとめ

本研究では、永野(1952)以来度々論じられてきた「から」の主観的、「ので」の客観的という性質について、話し手の心的態度を表す前件のモダリティ表現との共起関係からその関連性を考察した。BCCWJの出版サブコーパス「書籍」を対象にして、モダリティ表現を用いる文が前件に現れた際の「から」「ので」との共起様相を調べた。その結果から「から」と「ので」は前件と後件をどのように接続するかを考察し、以下のような結論が得られた。

第一に、「から」は共起されるモダリティ表現に偏りが生じており、主に使われる表現が限定される一方で、「ので」は多様な種類のモダリティ表現と共起されており、「から」より包括的な範囲で使用することが可能である。

第二に、「から」は「わけだから」、「というから」など、話し手が前件の事柄をそのまま伝える際に最も使用される。その場合、話し手は前件の事柄に対する確信が高いことをモダリティ表現を用いて提示し、「から」は後件をより客観化させて一般的な当然の成り行きの結果として接続する機能を持つ。

第三に、「ので」は「たいので」、「と思うので」、「かもしれないので」など、話し手自身の希望や事柄に対する直感的な感覚を表すモダリティ表現と主に共起される。この場合は前件の事柄が話し手の意思に近いことをモダリティ表現で際立たせて、後件を主観的にとらえる機能をする。

以上の結果から、このような本稿の結果は、永野(1952)の主張とは異なる結果となり、国広(1992)が述べる「から」の性質に関する主張を支持する結果となった。すなわち、モダリティ表現と共起する「から」と「ので」は、前件のモダリティ表現の影響を受けて後件をそれぞれ「主観的」、「客観的」ととらえており、モダリティ表現を使用しない「から」「ので」文より後件に強く影響を与えたとと言える。

本稿では「から」「ので」の「主観/客観」の性質を把握するために前件に用いられるモダリティ表現との共起様相を観察し、全体的な傾向から考察したが、接続に関する制約などの詳細については次回の課題とする。

参考文献

- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』くろしお出版。
- 伊藤勲(2005)『条件法研究 - いわゆる接続助詞をめぐって』近代文芸社。
- 今尾ゆき子(1991)「カラ、ノデ、タメーその選択条件をめぐって」『日本語学』10:12, pp.78-89. 明治書院。
- 岩崎卓(1995)「ノデとカラ—原因・理由を表す接続表現—」『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編. くろしお出版。
- 尾方理恵(1993)「「から」と「ので」の使い分け」『国語研究 - 松村明先生喜寿記念編』 pp. 844-861. 明治書院。
- 加藤重広(2008)『日本語文法入門ハンドブック』研究社。
- 国広哲弥(1992)「「のだ」から「のに」・「ので」へ—「の」の共通性—」『日本語研究と日本語教育』 pp. 17-34. カッケンブッシュ寛子他編.名古屋大学出版会。
- 趙順文(1988)「「から」と「ので」—永野説を改釈する—」『日本語学』7:7, pp.63-77. 明治書院。
- 永野賢(1952)「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29:2, pp.30-41.
- ナロック, ハイコ(2009)「モダリティと文の階層構造」『言語』38:1, pp.34-41.
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版。
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法』くろしお出版。
- 森田良行(1989)『日本語の類義表現』創拓社。
- 森山卓郎・安達太郎(1996)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 6 文の述べ方』くろしお出版。
- 山崎誠(2011)「「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の構築と活用」『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会予稿集』 pp.11-20.
- 山田みどり(1984)『研究資料日本文法』鈴木一彦・林巨樹編第5巻助詞編.明治書院。
- 李惠正(2013)「接続助詞「から」と「ので」の接続文体について - 日本語コーパスを用いて -」『日語日文学』大韓日語日文学会(韓国) 57, pp.49-61.